

---

## ランチョンセミナー 14

5月17日(日) 12:50～13:40

第5会場 福岡国際会議場 2F (204)

# 疫学的視点から見たわが国の肝炎ウイルス感染の現状と課題

講演者：田中純子(広島大学大学院医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学 教授)

司会：池田勝義(熊本大学医学部附属病院 医療技術部部长・臨床検査技師長)

共催：オーソ・クリニカル・ダイアグノスティックス株式会社

---

世界保健機構 (World Health Organization :WHO) の推計によると、世界全体でのC型肝炎ウイルス (HCV : Hepatitis C virus) 持続感染率 (HCV キャリア率) は平均約2%で約1.5億人、毎年30～50万人が肝がんをはじめとするHCV関連肝疾患により死亡していると試算している。一方B型肝炎ウイルス (HBV : Hepatitis B virus) キャリアは約2.4億人で、毎年60万人がHBV関連肝疾患により死亡すると報告されている。

わが国の死因別にみた死亡率は『悪性新生物』による死亡が約30%と第一位を占め、その臓器別内訳では、肺がん、胃がん、大腸がんに次いで『肝がん』は第4位と上位に位置し(2012年)、近年の高齢化の影響を調整した場合、肝がん死亡の全体リスクは減少傾向を示しているものの、肝がん死亡の実数は依然として年間3万人を超え、わが国の疾病対策上、重要な疾患のひとつである。これまでの血清学的または病理学的研究成果から、肝がんの約80%以上が肝炎ウイルス持続感染を起因としたものであり、特にHCVに起因するものが多いことが明らかになっている。

我が国では、世界に先駆けHBV関連検査はもとより、輸血用血液へのHCV抗体スクリーニング、核酸増幅検査の導入など新規感染対策に着手し、また2002年以降全国一斉に40歳以上の住民検診へ肝炎ウイルス検診を開始するなど先駆的に肝炎ウイルス感染対策が実行されてきた。治療においても、近年、ウイルス排除率の高い抗ウイルス薬が次々に開発・発売され治療に導入されている。

現時点のわが国の肝炎ウイルスの感染状況を疫学的視点から検討することは、現在および将来の感染予防対策のみならず、キャリア対策、治療戦略を含んだ医療政策を構築する上で重要であると考えられる。2000年以降に得られた二つの大規模集団の成績を元にした地域別出生年コホート別にみた肝炎ウイルスキャリア率 (prevalence)、一般集団およびハイリスク集団における肝炎ウイルス新規感染率 (incidence) の状況を示すと共に、社会に潜在するキャリアの推計数等を中心とした肝炎ウイルス感染に関する現状と課題について疫学的視点から紹介する。